桶川

卵の殻で作る名刺でSDGs実現

櫻井裕也さん「渋沢栄一ビジネス大賞」受賞・桶川市役所で使用開始

桶川市役所では国連が進める持続可能な開発目標（SDGs）推進の一環として、職員は4月から卵の殻を再利用した名刺を使い始めました。

この名刺を提案したのはプラスチック事業や食品添加物の開発・輸出を手がける地元業者の櫻井裕也さん。新しい事業の展開や革新的な技術開発に挑戦している県内中小企業を埼玉県が表彰する「渋沢栄一ビジネス大賞」で、昨年は「卵殻を60％使用したバイオプラ事業」で奨励賞、今年は「卵殻を使用したパルプ代替とCO2削減モデル」で見事大賞を受賞しました。

渋沢栄一ビジネス大賞賞状を持つ櫻井さん

櫻井さんは食品関連事業でデザートを作る中で卵の殻のごみが大量に出るのを見ていてアイデアを思いつきました。卵の殻は産業廃棄物として焼却処理されますが、これを利用できないかを思案し、殻をパウダー状にした商品を開発。野球選手などが使う滑り止めの粉のロジンバッグ、チョークやライン引きに使う石灰の代用など、環境を破壊せず、もし口に入ってしまっても無害などの利点があり、ごみの減量にもなります。

市で使う名刺には卵の殻が10％入っています。紙の原料として使い、パルプを減量、それに伴い森林伐採による森林の減少を抑制できます。

また、櫻井さんは県内に事業所を持つ2社と共に立ち上げた「エコ玉プロジェクト」にも力を入れています。協賛する39社は、名刺のほかポスターやクリアファイルなどにも殻を使用。また、津波被害があったフィリピンなどの海岸線にマングローブを植林する取り組みも行っています。

櫻井さんは「マングローブは植物なので二酸化炭素を吸収し、成長すると防波堤にもなり津波の被害を減らすことができます。こうした取り組みがお金を使わずに自然の力でできるんですよ」と話しました。